

2022年度ものの見方・考え方講座 齊藤日出治

テーマ 近代市民社会の政治と社会闘争の課題

第1講	はじめに 関西生コン弾圧と市民社会の暴力	5月10日
第2講	近代市民社会の暴力と政治	6月8日
第3講	関西生コンの弾圧と広義の市民社会	7月13日
第4講	関西生コンの弾圧とレイシズム	8月10日

第2講 近代市民社会の暴力と政治 6月8日レジュメ

はじめに 近代市民社会論の脱構築

近代社会は、先近代諸社会にはなかった固有の身体・時間・空間の概念を生み出した。近代以前の諸社会においては、ひとの身体は、他者の身体と共振し、時間および空間と不可分につながっていた。時間は、近代世界とは異なり、季節や生活のリズムと不可分につながっていたため、時計という機械によって測定される抽象的・客観的な時間ではなかった。空間には、ひとの身体が住み込んで、ひとの身ぶりとは不可分につながっていて、空間は物差しで測られる抽象的・客観的な距離ではなかった。

近代社会は、あらゆる富が商品という形態をとる世界(商品世界)であり、この世界が、身体と不可分に結びついていた時間と空間を切り離し、身体の具体的な身ぶりは抽象的な人間の機械的な所作の集合体へと変質する。それとともに、空間と時間は身体の所作とは無縁な、客観的で抽象的な尺度へと変質する。

近代社会が生み出した抽象的人間、抽象的身体、抽象的時間、抽象的空間は、生きられる身体・時間・空間の世界を解体し、身体と時間と空間の不可分なつながりを破壊する。そして、ひとびとを抽象化された個人に分断する。近代市民社会は、先近代の生きられる経験の世界を暴力的に解体し、市場取引によって一元的に組織される世界(商品世界)を生み出す。

近代市民社会をこのような暴力性をはらんだ社会として再認識することによって近代市民社会がはらむ可能性を浮き彫りにするための方法論として、市民社会の概念を脱構築する。

注

「脱構築」(ジャック・デリダ)—二項対立に揺さぶりをかける 秩序と無秩序、同一性と差異、マイナスとプラス、は絶対か → マイナスの側に注目して「位階秩序を転倒させる」

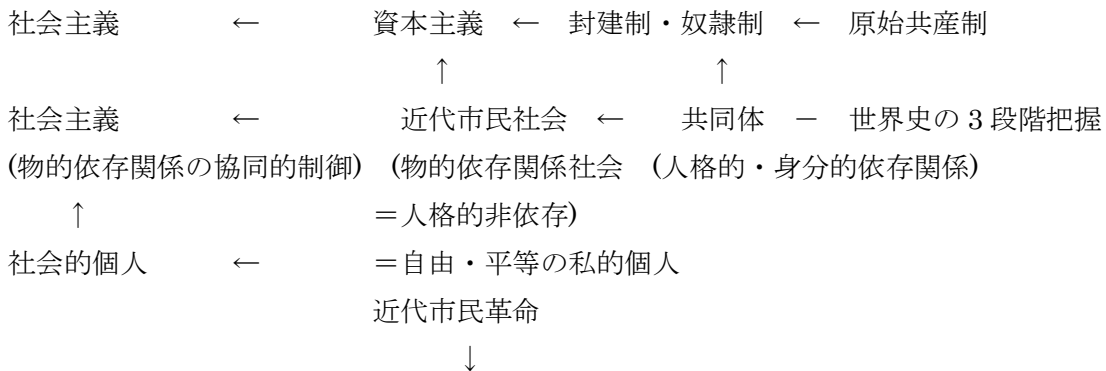
千葉雅也『現代思想入門』講談社現代新書 41 頁

市民社会=善 対 共同体=悪 → 市民社会論を、この善と悪の「位階秩序」を転倒するものとして読み直す

一 近代市民社会の暴力—近代市民社会論の脱構築

1 平田清明『市民社会と社会主義』(岩波書店,1969年)の市民社会論をどう評価するか

マルクスの唯物史観を階級一元史観とする歴史認識への批判



平田市民社会論は、「典型的な西欧社会を理想化」(石田雄)するもの → 本源的な市民社会(理想社会)が階級社会へと疎外される → 社会主義は、その階級社会を本源的な市民社会にもどすこと

→ 「マルクスをアダム・スミスに還元する試み」(佐藤金三郎)

↓

平田市民社会論が問おうとしたもの

20世紀社会主義における市民社会の不在—一個人の人格的自立なき商業社会の片面的な発展、封建的な身分関係の残滓、人権・市民権の未確立

= 日本における市民社会の不成立 → 近代西欧型市民社会を理念型にして、その理念型を戦後日本にいかにして実現するか、を問うた。

↓

市民社会の大衆社会への転換—1980年代以降 → 平田市民社会論はこの大衆社会状況に対応できない時代遅れの思想、市民社会論の終焉(植村邦彦)

2 近代市民社会論の脱構築—近代市民社会がはらむ暴力性の発見

近代市民社会は、旧代的市民社会(古代ギリシャ・ローマ)と旧代的階級社会(奴隷制、農奴制)の解体のうえに成立する。= 共同体の解体

古代ギリシャ・ローマの都市、中世の都市における市民社会は、「共同体の固有な一属性として成立展開している」のに対して、近代市民社会は「共同体の解体のうえに成立する」68頁= 共同性を奪われた私的個人の集合体

↓

近代市民社会は、共同体を解体する暴力(共同性の喪失)によって出現した= 協同性を奪われた私的排他的な個人によって構成される社会である。そのゆえに、近代市民社会は資本家社会へと自己転変し、階級社会を生み出す。

「市民的生産様式が旧代的生産様式と闘争しつつ自己展開し、資本家的生産様式へと転変する過程こそ、マルクスの言う「近代社会」の形成過程にほかならない」67頁

「マルクスの言う「近代社会」形成の過程とは、一方では、旧代的生産様式に対して市民的生産様式が闘争する過程であり、同時に他方では、市民的生産様式が資本家的生産様式へと自己転変する過程である。前者の過程においては、**共同体の破壊**、すなわち私的所有の形成という姿で個体的所有の開花が進展する」。70 頁

3 近代市民社会は共同体の何を解体したのか？

共同体とはいかなる世界なのか？

生きられる身体・空間・時間の世界の解体

＝近代市民社会の暴力

↓

商品世界による抽象的身体・抽象的空間・抽象的時間の生産

あらゆる労働生産物が商品(等価物)として表象される世界 → 土地・労働力・貨幣が擬制商品として表象される世界

具体的有用労働 → 抽象的人間的労働

(使用価値) (交換価値)

生きられる身体 → 抽象的・生理的身体

生きられる時間 → 抽象的・客観的時間

生きられる空間 → 抽象的・客観的空間

4 コミュニズムとはいかなる世界なのか？

① 近代市民社会において失われた共同性の再建

＝個体的所有の真実化

「資本制的私有財産の葬鐘が鳴る。収奪者たちが収奪される。」597 頁川出書房

資本制的な私的所有は、自分の労働を基礎とする個人的な私的所有の第 1 の否定である。」 →

「それ自身の否定」＝「否定の否定」

「この否定は、私的所有を再建するわけではないが、しかし資本主義時代に達成されたもの—すなわち協業や、土地の・及び労働そのものによって生産された生産手段の・共有—を基礎とする個人的所有を生み出す」597 頁

私的所有の世界($G-W \cdot \cdot P \cdot \cdot W-G$ の運動の世界)＝共同性を奪われた私的個人が物象を媒介にして社会化される世界

↓

個体的所有の再建＝私的諸個人が物象を媒介せずに自覚的・意識的に関係して物象化された社会諸関係を制御する世界＝アソシエーション

＝商品の物神性の章

「共同の生産手段をもって労働して、その多くの個人的労働力を自覚的に一つの社会的労働力として表出するような、自由人の団体」長谷部訳 71 頁

私人が自己の失われた共同性をとりもどし、社会的個体としての自己を創造する過程

② 生きられる身体・空間・時間の再建・真実化

—所有 **propriete** の転換の深層に潜む領有 **appropriation** の実現

都市への権利、空間の領有—**H・ルフェーヴル**

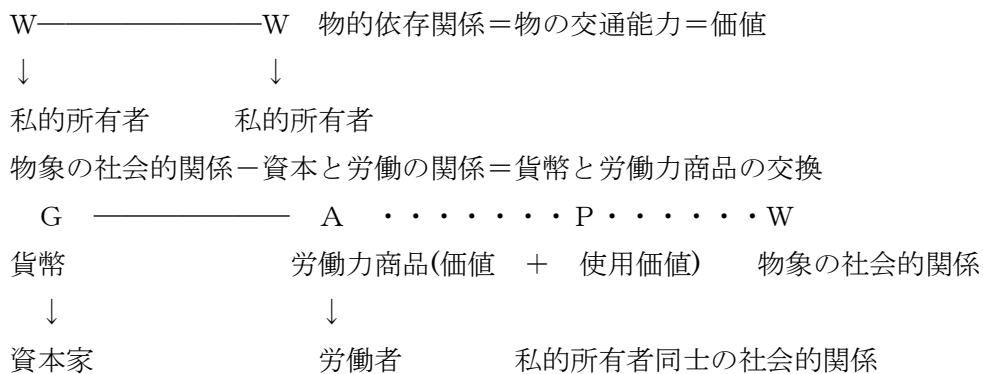
基盤的コミュニズム—**D・グレーバー**

自由の王国、自由時間—**K・マルクス**

5 近代市民社会に固有な政治(力の作用)の出現

人間・身体・時間・空間の抽象化 → 身体の政治、時間の政治、空間の政治 → 身体の所作、および生命活動の統治(生権力) + 社会集団の統治(記号・言説に媒介された集団の組織化)と差別

1 商品世界(人格の物象化された世界)に固有な階級発生—商品関係、資本—賃労働関係



→ 物象の人格化が発動する固有の権力 = 近代市民社会の政治
=生権力(M・フーコー)

→ 規律訓練権力=労働者の身体に働きかけ労働する主体として規律づける権力

生権力=集団としての生命活動に働きかける権力—人口、公衆衛生、出産、育児、教育、福祉・・・
労働者の身ぶりを監視し組織し共振させる権力—労働(工場や企業組織における集合労働力の組織化)、教育、余暇、・・・

労働者の生命活動の総体に働きかける権力—受胎調節指導、公衆衛生、人口統計、国勢調査

近代の階級闘争は、生権力をめぐる権力闘争—労働日・賃金・労働条件をめぐる闘争

2 社会集団を統治する力の作用—生権力の作動と連動する社会集団の統治作用

近代市民社会における2つの集団形成

1) 物象の人格的定在が生み出す集団の生産—資本の物象化としての資本家集団 → 株主、経営者団体、金融資本家、産業資本家

2) 抽象的な記号を介した社会諸集団の生産

＝近代市民社会に出現した抽象的個人を、抽象的な記号を介して集団として編成する力の作用

+

この記号による階層秩序を正当化する言説—性科学、人種学、人的資本論、優生思想、能力主義—
知の真理探究と権力

性の記号—ジェンダー(性別役割分業)、セクシュアリティ(異性愛) → 性差別＝セクシズム

人種の記号—人種学による生物学的差異 → 文化的差異＝「差異主義的人種主義」(E・バリバール) → レイシズム

労働能力の記号—能力主義と優生思想、IQ → 障害者差別

ナショナリティの記号—国籍＝人種 → 外国人の排除、国家間戦争

↓

社会諸集団を階層序列化し優劣関係に置くカーレイシズム、セクシズム、障害者差別、能力主義、
優生思想、

→ 生権力が発動する殺す権力—生かすべき者と殺すべき者の峻別

みずからが生きるために殺すべき集団を峻別する

M・フーコー

先近代の権力—殺す権力—生殺与奪の権力 → 生きるがままに任せる—生を統治することの不可能性 → なぜか？ 農奴は領主権力の外部で(共有地)で自己の生存を確保したから、領主が農奴の生を統治することはできなかった

近代の生権力—他者を自己のために生かす権力—身体の規律訓練 + 類としての生命活動に介入する

→ 生権力が発動する殺す権力—自らが生きるために殺すべき集団を創造する＝「社会は防衛しなければならない」＝生かす権力を行使するための殺す権力の発動

↓

近代社会—生権力と階級闘争の複合的重層的展開

→ 政治経済学が考察の対象としてブルジョア社会を超える考察を必要としている

→ 市民社会とレイシズム

6 二つの市民社会論—階級闘争と市民社会の政治との節合

平田清明『市民社会とレギュレーション』(岩波書店,1993年)

1) マルクスの市民社会論

『哲学の貧困』1847年 La misere de la philosophe

■ ブルジョア社会—物質的生産諸関係＝経済的土台

＝ 市民的交際形態と生産諸力の総体

政治経済学 political economy 重商主義—古典派経済学が考察した社会

↓

経済学批判としての『資本論』＝ブルジョア社会の批判的自己了解の書

マルクスはこのブルジョア社会の批判的認識とは区別されるもうひとつの市民社会論を構想して

いた

■ 広義の市民社会—物質的生産諸関係と政治的上部構造に架橋する政治

国家論の課題 → マルクスにとって国家とは、物質的生産諸関係と区別された政治的上部構造に限定されるものではなく、その双方を含みこむ広義の市民社会のこと、「総過程的媒介としての政治」平田清明

2) グラムシ『獄中ノート』の市民社会論=国家論=広義の市民社会論

国家= 強制 + ヘゲモニー(合意)
上部構造としての国家 総過程的媒介としての政治
=上部構造にも、中間領域(市民集団)にも、
還元しえない

「アメリカニズムとフォーディズム」

アメリカ型生活様式=都市型生活様式 — フォーディズム=大量生産・大量消費の成長体制

マルクスとグラムシにおける市民社会論の誤解

マルクスの市民社会論=ブルジョア社会論=経済的土台

グラムシの市民社会論=国家論—政治的上部構造論

→ マルクスも、グラムシも、ともに広義の市民社会を通してブルジョア社会を論じ、広義の市民社会の視座から階級闘争を位置づけている。

7 二つの市民社会論の関係

ブルジョア社会は、それ自体として自存しえない。それは広義の市民社会の媒介によって、その媒介を通してはじめて成立し得る。狭義の経済領域を超えた社会のあらゆる諸領域における力の作用を介して、ブルジョア社会は組織される。

ブルジョア社会における階級闘争も、広義の市民社会における社会闘争を不可避的に経由する。後者の社会闘争のありかたが前者の階級闘争のあり方を規定する。

マルクス自身が『資本論』でそのことを語っている。

D・ハーヴェイ『資本の謎』

剰余価値論における「共進化」概念の展開

資本—賃労働の階級関係は、社会のあらゆる領域における社会諸集団の組織化様式を媒介にして組織される。階級闘争は、部落差別、性差別、障害者差別、レイシズムといったもろもろの社会集団を劣位に置く政治との闘いと不可分に連動しており、これらの反差別の社会闘争と分かちがたく連携している。

